Mon Nara

Numéro282 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会 JUILLETーAOÛT 2017 7ー8 月合併号

秋の教養講座 2017
講演「モリエールとその時代」

９月 23 日（祝・土）放送大学奈良学習センターにて開催
講師 山本邦彦（奈良女子大学名誉教授）会員

モリエール（1622-1673）の肖像画

17 世紀のフランスは、太陽王ルイ 14 世の治下のもと、世界に冠たる文化国家を築いていました。あの有名なヴェルサイユ宮殿はまさにその象徴です。その時代に 3 人の傑出した劇作家が現れました。コルネイユ、モリエール、ラシーヌです。

今回の講演では、このうち喜劇作家のモリエールをとりあげ、できるだけ多くの映像を皆さまにお見せしながら、彼の生涯をたどるとともに、その時代が、そして特に国王ルイ 14 世との関係が、彼の“人と作品”の形成にどう関わったかを考えてみたいと思います。

モリエールはパリの裕福な商家の跡取り息子でした。それがいったい全体どう魔がさして芝居の世界に飛び込んだのでしょうか。パリでの劇団の旗揚げに失敗して、13 年間の地方巡業の末、ふたたびパリに戻ったときには 36 歳になっていました。

『タルチュフ』の舞台

それからの 15 年間、法曹界や宗教界からの迫害や日に日に悪化する病と闘いながら、憑かれたようにつぎつぎと大作を舞台に乗せます。『女房学校』『タルチュフ』『ドン・ジュアン』『人間嫌い』『守銭奴』『町人貴族』『女学者』。そしてこの間、王侯貴族からの注文に応じて、祝祭用の笑劇や舞踊劇も数多く制作しました。しかし無理に無理を重ねたモリエールは『病は気から』の 4 日目の終演直後、気で病むどころかほんものの血を吐いて亡くなります。1673 年 2 月 17 日、51 歳のときでした。カトリック教会から忌み嫌われた役者ゆえにまともな葬儀もあげてもらえませんでした。

モリエールは 1662 年にアルマンド・ベジャールと結婚した後、妻の浮気に悩みました。呼吸器の疾患にも苦しみました。『タルチュフ』や『ドン・ジュアン』の上演禁止にも心を痛めました。そんなときに国王から来る笑劇制作の急な注文は、モリエールをほとほと疲れさせました。いったいモリエールにとって国王はなんだったのでしょうか。そしてまた国王にとってモリエールはいかなる存在だったのでしょうか。

限られた時間のなかで、モリエールという不世出の喜劇作家を、17 世紀フランスという時代背景のもとに浮かび上がらせることができればいいな、と思っています。 （山本邦彦）

日時：２０１７年９月 23 日（祝・土） **主催**：奈良日仏協会、放送大学奈良学習センター
会場：講演会 15:00～17:00 放送大学奈良学習センターZ308 講義室（参加無料、但し要申込）
懇親会 17:30～19:00 「菜宴」（奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F, tel 0742-26-0835）
（参加費：会員 3,000 円、一般 3,500 円）
参加申込：９月 17 日までに、メール tetsu11-kyo13@docomo.ne.jp 他
※詳しくは本号同封のチラシをご覧ください。

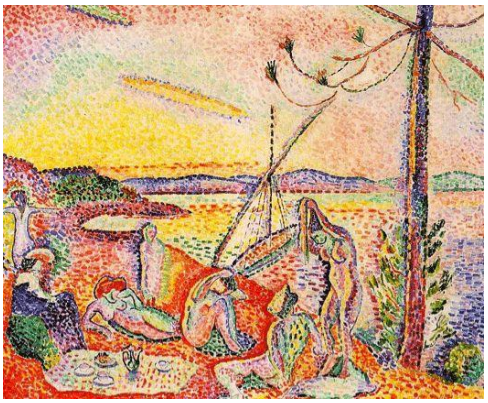
2017 年度の年会費未納の方には、振込用紙を再送させていただいております。速やかにお振込みくださるようお願い申し上げます。なお、すでに納入済みにも関わらず振込用紙が同封されていた場合には、下記事務局までご一報ください。どうかよろしくお願い致します。（奈良日仏協会会計・事務局）
E-mail：nara.afj@gmail.com Fax：0742-62-1741
郵送先：〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング「菜宴」方 奈良日仏協会

フランス文学の庭から 〈52〉

名句の花束

三 野 博 司（会長）

豪奢、静けさ、逸楽
Luxe, calme et volupté
（ボードレール『悪の華』1861 年）



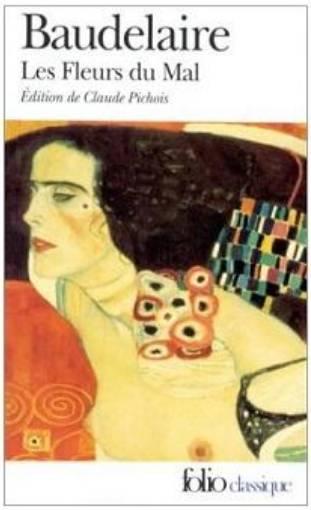
Henri Matisse, *Luxe, Calme et Volupté*, 1904, Musée d'Orsay, Paris

ドビュッシーに詳しいというわけでは毛頭ないのですが、フランス音楽ならやはりこの作曲家を抜きにしては語れないし、また 2011 年 9 月奈良日仏協会のシネクラブで『ペレアスとメリザンド』（ブーレーズ指揮、ウェールズ・ナショナル・オペラ）を取り上げたとき解説めいたものを引き受けた経緯もあり、奈良日仏協会理事の藤村久美子さんのピアノ演奏に三野が少し話を添えて、ドビュッシーの演奏会をやろうという企画が 3 年前からありました。

それが思わぬ形で発展して、今秋の 11 月 23 日（木・祝）、宇陀市において、Foyer Vert 開設 25 周年記念コンサート「詩と音楽のマリアージュ――フランス歌曲の午後」を開催することになりました。藤村さんと三野に、バリトン歌手の水谷雅男さんが加わって、ボードレールとヴェルレーヌの詩に、デュパルク、フォーレ、ドビュッシーが作曲した歌曲（Mélodie）を取り上げます。

というわけで、その企画とも「コラボ」して、今回はシャルル・ボードレール（Charles Baudelaire, 1821-1867）です。パリに生まれ、生涯をパリで過ごした生粋の都会っ子です。1827 年、6 歳のときに父が亡くなり、母親が再婚しますが、この継父との葛藤が生涯続くことになります。1857 年、彼は長年彫琢を重ねてきた詩篇をまとめて詩集として刊行し、これに『悪の華』と表題をつけました。世のなかで悪と見なされているもののなかに潜む華、すなわち美をうたい上げたのです。これを読んだユゴーは、1859 年 10 月 6 日の手紙で、「君は新しい旋律を創造した Vous créez un frisson nouveau」と讃えます。ただナポレオン三世が治める第二帝政下で、出版物の検閲がきびしい時代でした。この詩集は、「風俗壊乱」の廉で起訴され、罰金刑を課され 6 篇の詩の削除を命じられます。

そこで、ボードレールは、1861 年、6 篇を削る代わりに、新たな詩篇を追加して、増補第 2 版、129 篇の詩を刊行します。全 6 部から成りますが、7 割近い詩が第 1 部「憂鬱と理想」に含まれます。「憂鬱」とは、経済的窮乏、恋の苦悩、肉体の衰え、老いと死への恐怖などですが、他方で「理想」は純潔と美へのあこがれです。そして、この「理想」をうたった数多くはない詩の一つが、「旅への誘い（いざない） L'Invitation au voyage」です。



これはまた、ボードレールの詩で、早い時期に歌曲となったものの一つでもあり、1870 年、デュパルクがみごとな曲をつけたことで知られています。原詩のほうは、3 つの詩節からなり、1 詩節が 12 行、そのあとに詩人の夢見る楽園が簡潔に要約された 2 行のリフレインが続きます。

Là, tout n'est qu'ordre et beauté,	彼処では、すべてがただ秩序と美しさ、
Luxe, calme et volupté.	豪奢、静けさ、そして逸楽。

この 5 語のうち、初めの ordre et beauté　の訳語はだれが訳してもあまり変わりませんが、あとの Luxe, calme et volupté.　のほうは、「奢侈、静寂、そして快楽」「壮麗、静謐、そして欲望」など、いろいろあります。そして、これをタイトルにした絵画を残したのが、アンリ・マティス（1869-1954）です。*Luxe, calme et volupté*（図版参照）。ボードレールの詩から半世紀近くを経て、1904 年、マチスが南仏のサン＝トロペでひと夏を過ごした後に描かれました。ここで彼は、シニャックが当時主張していた点描画法を取り入れています。もっとも、翌年にはマチスはこの技法から離れます。1905 年はフォーヴィスム誕生の年であり、彼はその開拓者となっていくのです。そして、マチス特有の楽園風景を描いたこの絵では、点描画法によりコート・ダジュールのまばゆい陽光が強烈に表現されています。では、ボードレールが夢見た楽園もそうなのでしょうか、それについては次回に。

三重日仏協会「柏木隆雄文芸講演会」参加報告

6 月 18 日（日）、津市において、三重日仏協会と放送大学三重学習センターの共催による文芸講演会が開催されました。講師は、大手前大学前学長、大阪大学名誉教授の柏木隆雄さん。今年でもう第 17 回になりますが、演題は「フランス象徴派詩人ヴェルレーヌはどう日本語に移されたか」。

最初に柏木さんの近著２冊の紹介がありました。「夕刊三重」の連載をまとめた「心の中の松阪」（夕刊三重新聞社）、および各地での講演集「＜こう読めば面白い＞フランス流日本文学――子規から太宰まで」（大阪大学出版会）。なみのフランス文学者にはとうていまねできない、著者の個性と話芸、文献考証と博覧強記がいっぱいつまった２冊です。

講演では、現在では知る人も少ない竹友藻風の遺業が紹介されました。詩人、評論家、英文学者、英仏伊文学の翻訳者……、こういうスケールの大きな「文人」が、昔はいたのですね。藻風といい、その師である上田敏といい、文芸が専門職に細分化する前の活力ある時代を代表しているように思います。ヴェルレーヌの藻風訳を、原文と照らし合わせ、他の訳と比較することにより、その特性があざやかに示されました。

17 時から駅前の Bistrot de Fleur で開催された懇親会にも、奈良日仏協会事務次長である浅井さんとともに参加しました。ここでも三重日仏協会の皆さんにはたいへんお世話になりました。（三野博司）

Le 14 juillet à Kyoto 2017　在京都フランス総領事館「パリ祭レセプション」

7 月 14 日（金）17 時から、在京都フランス総領事館において恒例の「パリ祭レセプション」が開催されました。昨年 9 月に着任したジャン＝マチュー・ボネル総領事による初めての le 14 juillet です。開会式において、総領事は、日本語で用意した原稿を読み上げ、着任以来の日仏交流を振り返り、行政の分野、大学交流、経済交流、そして各地の日仏協会の活動において、着実な成果が上がっていることを示されました。行政の分野では、昨年 10 月の奈良市・ヴェルサイユ市姉妹都市提携 30 周年事業にも言及されました。奈良日仏協会からは三野会長、ジャメ副会長が出席し、パーティにおいて、姫路日仏協会の白井智子会長を始めとして、各地の日仏協会代表との交流を深めました。三野からはボネル総領事に、機会があればぜひ奈良を再訪していただくようにお願いしました。（三野博司）

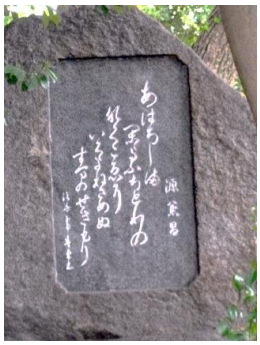
フランス語で読む日本古典：『源氏物語』１２帖　＜須磨＞

源氏物語の中で「須磨の帖」は小説が始まって初期の段階で、光源氏 25 歳ころの不倫事件の結果生じた蟄居生活の日々が展開されて行きます。須磨は当時、首都圏内とはいえ、うら寂しい海浜です。沖を往還するのは、京と西国諸国や九州を結ぶ船便です。源氏は土地の有力者の娘である「明石の君」を見染めて、最終的に源氏の一人娘を産んだことにより、宮中の女性で第三の地位を得ることとなります。源氏物語が、この浦に照る名月を眺めながら須磨の帖から起筆されたとする学説もあります。（中浦東洋司）

≪世の中、いとわづらはしく、はしたなきことのみまされば、「せめて知らず顔にあり経ても、これよりまさることもや」と思しなりぬ。「かの須磨は、昔こそ人の住みかなどもありけれ、今は、いと里離れ心すごくて、海人の家だにまれに」など聞きたまへど、「人しげく、ひたたけたらむ住まひは、いと本意なかるべし。さりとて、都を遠ざからむも、故郷おぼつかなかるべきを」、人悪くぞ思し乱るる。よろづのこと、来し方行く末、思ひ続けたまふに、悲しきことといと様々なり。≫

Sa position était fort délicate et ne faisait que s’aggraver, aussi en venait-il à se dire que s’il s’obstinait à demeurer à la capitale en feignant l’indifférence, il pourrait bien lui arriver pis encore. Il avait ouï dire de Suma que si jadis certes des gens de qualité parfois en avaient fait leur retraite, ce n’etait plus à présent qu’une effroyable solitude, loin de tout lieu habité, où les maisons de pêcheurs même étaient clairsemées; mais un lieu fréquenté, où on l’eût remarquée, n’eût du tout convenu à son dessein. Malgré cela il se tourmentait vilainement à l’idée que, s’il s’éloignait de la capitale, l’inquiétude le rongerait de ce qui pouvait y advenir. Qu’il évoquât le passé ou qu’il songeât à l’avenir, ce n’était partout que raisons diverses de s’affliger.

(traduit par René Sieffert)



須磨の帖の一節にヒントを得て作られた源兼昌(平安末期の歌人）の歌碑「あはじしま通ふちどりの鳴くこゑにいく夜ねざめぬ須磨のせきもり」

第 136 回 フランス・アラカルト（7/3）報告

◆フランスの詩人・作曲家で国民的歌手のジョルジュ・ブラッサンス (Georges Brassens, 1921-1981) のシャンソンと人となりを知るアラカルトがありました。彼は芸術家になる夢を抱きながら若者らしい愚行を重ね、そんな経験も後にシャンソンの歌詞に生かされているようですが、芯のところは、政治の右派か左派か、善か悪かを決める見方を拒否する硬派でした。「強盗」や「不貞の輩」にさえ肯定的な価値を与える作風は、肩こりも治ってしまう愉快さです。ゲストのセドリック・ベレク先生はもともと音楽の先生をされていて、ギターの生演奏でブラッサンスの曲を披露してくださいました。さいごは、ゲンズブールの「枯葉に寄せて」(La Chanson de Prévert) を、先生についてみんなで唄いました。同じフレーズを何度も繰り返してくださり、耳に残る音色と共に、この夏を弾む心で愉しく過ごせそうです。（河野美紀子）

◆ブラッサンスについてはあまり知りませんでしたが、生涯の主要な出来事と歌詞にこめられた思いがよく分かりました。なかでも彼の徹底した平和主義と反権力志向には感銘を受けました。対独協力者もレジスタンスも同じで、ユダヤ大虐殺も広島原爆もともに非難する姿勢。また自分たちの土地や国がいちばんだと言って他者を排撃する人々を諌め、他者を許すことが復讐の連鎖を断ち切り平和をもたらすという主張。その根底には、この世に命をかけるほどの思想などないという信念や、導こうとするものを拒否する精神、自分の記憶だけが宝だと思う気持があります。こうした性向は、彼の生まれが第一次大戦の直後で、第二次大戦中に青春を送ったという境遇が大きく影響しているように感じました。自分の学生時代を振り返って、当時はベトナム戦争のただなかで、反戦や反権威の気分にどっぷり浸っていたのを思い出しました。ベレク先生のギターと歌声もすてきでした。（杉谷健治）

◆ブラッサンスを知ったのはいつ頃だったろうか。私の手元に古い録音テープがある。フランス語を勉強していたとき、シャンソンもあれこれ聴いて歌って一人で楽しんでいた。お気に入りの曲は Le parapluie（雨傘）。この歌は長調の軽快なメロディーで、雨の日を明るくしてくれる。おとぎ話みたいでおしゃれなシャンソンだ。ベレク先生は、ブラッサンスの生い立ちから始まって、詩を紹介しながら彼の生き方を浮かび上がらせた。たくさんの発見があり興味深くて、あっという間の２時間余りだった。ブラッサンスが生きたのは戦争とそれに続くイデオロギー対立の時代。けれど、彼の歌はとても自由で、何ものにもとらわれない。言葉とメロディーがとてもいい。これは現代の私たちに必要な、平和のための歌じゃないかしら。そんなことを思った。ベレク先生、ありがとうございました。皆さま、また一緒にシャンソンを歌いましょう！ （小原千賀子）

◆フランスの文学・文化・社会状況を踏まえ、含蓄に富んだブラッサンスの歌詞を、ベレク先生ならではの視点で解説してくださり、いまなお広く支持されるブラッサンスの独自性をあらためて認識することができました。例えば、先生自らギターで弾き語りしてくださった強盗への共感を示す「Stances à un cambrioleur 強盗への詩」のおしまいのフレーズ。« Post-Scriptum, si le vol est l'art que tu préfèrs 追伸、盗みが君の大好きな技で／ Ta seule vocation, ton unique talent 君のたった一つの天職、独自の才能なら／ Prends donc pignon sur rue, mets-toi dans les affaires 通りにお店をかまえて商売に励みなさい／ Et tu auras les flics même comme chalands するとお巡りだって、いいお得意さんになるから» 。この歌詞のさいごの行で用いられている flics「警官」が現代的な俗語であるのに対して、chalands「お得意」はあまり日常では使われない古い語だそうです。こうした異質な言葉の取り合わせによって、ブラッサンスの歌詞全体が含む独特のイロニーも、いっそう勢いづいてくるのかもしれません。（浅井直子）

奈良のみなさんと一緒に歌うことができました　Cédric Belec（セドリック・ベレク）

Originaire de Bretagne, la nature tient une place importante dans mon cœur. Nara, avec ses paysages majestueux, ses montagnes et ses nombreuses cascades ne manque donc pas de me plaire. Mais cette ancienne cité impériale ne serait pas ce qu'elle est sans ses habitants. Leur gentillesse, leur prévenance et leur modestie sont sans égal. C'est donc avec un grand plaisir que je suis venu vous parler de Brassens, un grand monsieur de la chanson française, dont les textes me séduisent par leur esprit, leur humour et leur impertinence. Je garderai un excellent souvenir de ce moment, passé en votre compagnie, qui s'est achevé, comme il se devait, en chanson.

ブルターニュ生まれなので、自然を大切に思う気持ちがありますが、奈良は山や滝などすばらしい自然の景色があるので、とても好きな場所です。でもこの古都はそこに住んでいる人たちがいてこそのもので、皆さん優しくて思いやりがあり、控え目な素晴らしい人たちばかり。その奈良でシャンソンの大御所ブラッサンスの話ができ、たいへん嬉しく思いました。彼の詩に溢れる機知、ユーモア、無作法が大好きです。奈良日仏協会の皆さんとご一緒して最後に皆で歌ったことはとてもいい思い出となりました。

フランス各地方の伝統菓子（3）アルザス❤お菓子の聖地-①

アルザス名物のリンツァー・トルテ

ドイツとの国境に位置するアルザスは、時にドイツ領、フランス領となり、両方の文化を感じる土地。例えばクグロフもオーストリア菓子系譜のケークタイプとブリオッシュのパンタイプがあるという具合です。数年前にワイン街道の小さな村、ニーデルモルシュビルにジャムの妖精と言われるマダム・フェルベールを訪ね、リンツァー・トルテ（タルト・リンツ）の研修を受けたことがあります。フランヴォワーズジャムを挟んで焼いたスパイス香る生地のタルトです。果物が豊富な当地ではタルトにはベリーやピーチ、あんずなどを生のままドーンと乗せて焼きます。あり余る果物はジャムに。一面にぶどう畑が広がり、ワイナリーで試飲も。パリから 1 時間半の気軽さですので、こちらもぜひ訪れていただきたい地方です。（柳谷安以子）

≪エコールタンタン≫ 講座案内　いずれも水・木・土曜日★「フランス地方菓子コース」（第 4 週 10:30～, 5400 円／回）、「地方料理コース」（第 3 週 11:00～, 6480 円／回）、「パリのお家ごはんコース」（第 2 週　11:00～, 5940 円／回）
★会場：エコール・タンタン（奈良市西登美が丘 8-9-21）★奈良日仏協会会員様は入会金 5000 円免除　★予約・問い合わせ tel. 0120-44-0341 柳谷安以子　★フランス地方菓子はシンプルですが、素材の美味しさと家庭の温かさが伝わります。地方料理もその土地ならではの美味しさ。チーズとワインもご一緒に！　いずれも現地の風土や歴史もご紹介しながら半実習の形で進めます。パリのおうちごはんコースは定期講読しているフランス人気料理雑誌からアントレ、メイン、デセール。まさに今のフランスのテーブルです。ランチをする感覚でいらしてください。フランスを食で巡りましょう！

第 44 回シネクラブ例会(7/23) 報告

前回の『トランプ譚』（Le Roman d’un tricheur）に引き続いて、サッシャ・ギトリ監督の映画『夢を見ましょう』（Faisons un rêve, 1936）。この作品も、ギトリが脚本・監督・主演をこなす奇才ぶりを発揮しています。『トランプ譚』ではギトリの回想風モノローグが物語の原動力になっていましたが、この『夢を見ましょう』も、ギトリの洪水のように溢れる言葉が重要な役割りをしていて、よくこんなに大量の言葉を覚えられるものだと感心してしまいます。

もともと芝居として作られたものを映画に直したもので、カメラは動かないまま人物が喋るという場面が多く、映画よりも演劇の要素が優っているという印象を受けました。それも完全な喜劇で、フランス喜劇の主要なキャラクターである「寝取られ亭主（コキュ）」がボケ役として登場し、頭の回転のすばやいギトリ扮する弁護士と対照的に描かれています。

面白かったのは、弁護士が人妻と一夜をともにした朝、二人で亭主にどう言い訳しようかと悩んでいるところへ、当の亭主が深刻な表情で訪ねてくる場面。二人はついに浮気がばれたと、妻は慌てて浴室に隠れ、弁護士は覚悟を決めピストルを背後に隠し持って戸を開けると、亭主もその夜浮気をしての朝帰りで、どう妻に言い訳したらいいかと相談に来たという次第。そこで、弁護士が持ち前の弁舌を駆使してすばらしい解決法を提示し、難局を切り抜けます。亭主をその場から送り出した後、人妻は弁護士との結婚を夢見、弁護士は束の間の情事が楽しめるぞと、同床異夢のまま二人で踊る場面で「Fin」となりますが、この後どうなるのかと心配になってしまいました。結局、亭主は妻に嘘をつき、妻も亭主に嘘をつき、弁護士は亭主にもその妻にも嘘をつくという嘘だらけの話。

ジプシー・オーケストラの奏でる音楽や、社交パーティの雰囲気、男女の正装、家具調度など、古いヨーロッパの名残りが感じられるのが、戦前の映画を見る楽しみでもあります。皆さんギトリの喋りの魅力に感じ入られたようでした。自前のモラルをしっかり持っているフランスの夫婦関係を見て、浮気でもしたらテレビで大騒ぎになっている日本との違いの大きさに驚いた（うらやましい？）という声もありました。（杉谷健治）

ロワール地方へ行ってきました

喜多 幸子（きた さちこ）

6 月初旬、花の美しい季節にヴェルサイユとロワール地方に行きました。ヴェルサイユ・シャンティー駅から列車を乗り継いでソーミュールの駅へ。ソーミュールはロワール川沿いの、城とワインで有名な街です。駅から車で川沿いに進みました。フランス最長のロワール川、その流域には田園風景が広がり、森のかなたには古城の優雅な姿が見え隠れし、時が止まっているのかと錯覚してしまうほど美しい景色が広がっています。

ロワール川沿いに佇む街モンソロー

ロワール川とシノン川の合流地点付近で川を渡ってモンソロー城へ。この地域ではお城や教会や家は全て付近の石灰岩を切り出して作られているので、街も川岸も山肌の崖も、みな同じ象牙色をしています。モンソロー村と、その隣のカンド・サン・マルタン村は「フランスの最も美しい村」に登録されています。それなのに村の中には観光客はおろか住民の姿さえ無く、静かな石畳の道に沿って並ぶ家々には美しい花が咲き、どこを切り取っても絵葉書になりそうな風景です。

ダンピエール・シュル・ロワールのワイナリー

その後、川沿いにたくさんあるワイナリーの一軒へ。石灰岩を建材として切り出した跡がワインカーブとして利用されています。ワインを試飲しながら聞いた説明によると、石灰質土壌は、保水性が高い一方で、水分が飽和すると反対に水はけが良くなる、というブドウ作りに最適な土壌とのこと。残念ながらこのような小さなワイナリーのワインはこの地方で消費され、日本などに輸出される事が無いのだそうです。

そこから車に揺られること小一時間、農場が広がるリニエール・ブトン村のはずれにある森の一角を入っていくと、そこに私たちが宿泊するオーベルジュがありました。ムーランブレジョンという名前の通り、もとは水車小屋です。車から降りるとラブラドールがお出迎え。庭には猫、アヒル、ガチョウ、ニワトリ。三階建の水車小屋を改造したオーベルジュの建物の隣にはその倍はありそうな木々が風にざわめき、自然の大きなパワーを全身で感じることができました。木漏れ日の中に草花が咲き、小川が流れ、そのせせらぎを覗き込むとビーバーがいて、水車小屋の周りにはバラやクレマチスの花が植えられ、中に入るとオーナーのセンスとこだわりを感じるインテリアやアンティークの家具と美しく飾られた花々が。20 年かけて作りあげた理想郷だそうです。

ムーランブレジョン

次の日はユッセ城、ヴィランドリー城、ジズーやランジェの街などを案内してもらい、オーガニックの素材で作られた食材店やせっけん工場などにも立ち寄りました。オーベルジュでの食事は近隣の農家からの野菜や果物をふんだんに使ったもの。窓から見える見渡す限りの緑の田畑。たった 2 泊の滞在でしたが、時代に流されない静かな美しさを頑固に守るフランスの田舎の素晴らしさを満喫することができました。

昨年末から「学び直しのフランス語」クラスで、文法や表現、文化などを教えていただいております。三野先生やクラスメートたちからフランスのいろいろな魅力あふれる情報をうかがい、触発され、これからもフランスの諸地方を訪れたいと夢を膨らませています。素敵なお仲間にお会いできるので、月曜日がとても楽しみになりました。

第 45 回 奈良日仏協会シネクラブ例会（10/22）案内

★10 月 22 日（日）13:30～17:00　★奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室（予定）
★プログラム：『パリの灯は遠く』（*Monsieur Klein*, 1976 年, 122 分, ジョゼフ・ロージー監督）
★参加費：会員無料、一般 300 円　★飲み会：例会終了後「味楽座」にて
★問合わせ：Nasai206@gmail.com（予約不要）★2017 年 5 月、俳優アラン・ドロン引退表明のニュースがありました。1960～70 年代日本では、「美男子」の代名詞のイメージで熱狂的な人気を博しました。当シネクラブでは今秋から来年にかけてドロン特集を組む予定です。第一回目は『パリの灯は遠く』。1942 年ドイツ軍占領下のパリで、ユダヤ人を顧客に美術商を営む男が、同性同名のユダヤ人と間違われ不条理な運命へと巻き込まれていきます。自らの「分身」のような存在に不安を抱く人物像をドロンが見事に演じ、とても見ごたえのある作品です。乞うご期待！（映画紹介は「奈良日仏協会」の HP をご覧ください）

会員紹介

文学で心を遊ばせる

長谷川 明子（はせがわ あきこ）

奈良日仏協会の会員になって 10 年以上経ちます。フランス語の勉強は停滞気味ですが、Mon Nara の記事や「フランス･アラカルト」、「シネクラブ」などの多彩な催しを通して、フランスの文化や芸術の奥深さに触れることが出来るのは大きな喜びで、なかでも文学に関する催しには、ほぼ欠かさず参加しています。

長年英語教師をしているので、英米文学に詳しいと思われがちですが、なぜか、記憶に残っている作品はフランス文学が多く、特にスタンダール、現代作家ではサガンを多く読みました。

純文学研究とは少々趣を異にしますが、私は「関西シャーロック・ホームズ会」に所属しています。英国の名探偵ホームズは、母方の祖母がフランス人（画家ヴェルネの妹）ということもあり、フランスと深い関係があります。数々の難事件を解決して、フランス政府からレジオン・ドヌール賞までもらっています。文学にも造詣が深く、会話の中で、フローベールがジョルジュ・サンドに送った手紙の一節や、ラ・ロシュフコーの「箴言」をさりげなく引用したりもしています。また、『赤い輪』という作品では、夫が妻に光の点滅信号で危険を知らせる場面があり、ホームズが解読しますが、これは、スタンダールの『パルムの僧院』からヒントを得たと考えられます。牢獄に閉じ込められているファブリスに、サンセヴェリーナ公爵夫人から「助けを待て」という光の合図が送られる有名な場面があります。高校時代に読んだ『パルムの僧院』は大好きな作品で、後年、映画でジェラール・フィリップのファブリスを見たときは、イメージにぴったりで驚きました。

文学散歩をしたり時代背景を調べてみたり、作品の中で心を遊ばせることが出来るのは、楽しく幸せなことだと思っています。

「最もホームズらしいホームズ」と評判だったジェレミー・ブレット主演のシリーズ作品を制作したグラナダ・テレビ局前で。（2002 年撮影　英国マンチェスターにて）

フランスとチーズとの出会い

北田 由佳　（きただ ゆか）

ご縁あって日仏協会へ入会させていただき、これまで Mon Nara で 6 回にわたって、チーズのコラムを書かせていただきました。簡単な紹介文でしたが、チーズって面白いと思って下さる方が増えればいいなと思います。

さて、私は現在夫とふたりで生駒市にてフランス料理店「ビストロ ルノール」を経営しています。華やかな絵付けもなく素朴な土味が魅力の陶器「備前焼」で有名な岡山県備前市生まれ。高校卒業後、念願の大阪外国語大学へ進学、専攻はフランス語と言いたいところですが実は中国語で、大学生活の 4 年間はアジアにどっぷりとつかっていました。大学卒業後、大阪市内のホテルでフロント勤務、後、大阪市内の繊維専門商社で働き、出産を機に退職。二児の母となります。

フランスと関わる転機となったのは大学生の時、ホテル内の飲食店でアルバイトをしていた時です。外国と関わる仕事に就きたいと思っていた私にとって、また、もともと食べることも飲むことも好きだった私は、当時、フランスから帰ったばかりの、フランス語も話せて料理人として働いている夫がとてもかっこよく見えました。

しばらくしてお付き合いをはじめ、夫にフランスワインの良さを教えてもらいます。そこから、週末にはワインとチーズとパンを楽しむ習慣が自然と身につきました。

その時の私にとって、チーズは「封を開けてすぐ楽しめるワインと一番合う手っ取り早いおつまみ」という存在でした。なにも分からず、ワインショップやデパ地下で手あたり次第試してみました。やがていろんな種類があり、味わいもさまざまなチーズに魅了されていきます。詳しく勉強していくと、チーズには背景に歴史があり、その土地ならではの造り方、食べ方があり、そこで暮らす人々の生活や文化が垣間見られることに益々興味を持っていき、育児の傍ら、猛勉強しチーズプロフェッショナルの資格をとったのです。のちに、ソムリエも。

ワインのみならず、お酒全般やチーズは嗜好品です。なくても生きていけます。しかし、ほんの少し知るだけでもとても興味深く面白いものですし、チーズやワインがある食卓は華やぎを与え、生活に潤いを与えてくれるものだと思います。これからも研鑽を重ね、お客様に還元していきたいと思います。

2017 年度ガイドクラブの案内　◆「勉強会」（講師：Pierre Régnier さん）

✤日時：2017 年 9 月 16 日（土）14:30～16:30　✤会場：奈良市西部公民館 5 階第 4 講座室（予定）（申込者に連絡）
✤参加費：会員 1000 円、一般 1500 円（当日資料代含む）✤内容：参加者は各自、フランスの好きな所やフランス語を勉強している理由等を、簡単なフランス語で話す練習をします。勉強会後、レニエ先生が添削してくださいます。

◆「大神神社散策」と「利き酒体験」（講師：Pierre Régnier さん）

✤日時：2017 年 10 月 14 日（土）JR 三輪駅（桜井線）に 14:00 集合、同駅 17:00 解散。その後、有志にて飲み会。
✤参加費：会員 1000 円、一般 1500 円（今西酒造での利き酒体験料含む）

大神神社と小説『豊穣の海』（三島由紀夫）について

三島由紀夫の最後の長編小説『豊穣の海』は、『春の雪』(1969)『奔馬』(1969)『暁の寺』(1970)『天人五衰』(1971) の全 4 巻から成る、夢と転生の物語です。第 2 巻の『奔馬』では、大神神社摂社率川神社の「三枝祭（ゆりまつり）」や、御神体「三輪山」への登拝の描写がみられます。三島氏は 1966 年 6 月率川神社の三枝祭に参列、さらに同年 8 月 22 日親友のドナルド・キーン氏と再度大神神社を訪れ、社務所に三泊参籠、23 日に三輪山裾の山の辺の道散策、24 日に三輪山登拝。感銘を受けた三島氏は色紙に「清明」としたためたことを記念する碑が、三輪山への登拝口がある狭井神社境内に建てられています。以下は、小説『奔馬』の主要登場人物の本多が三輪山に登り始める場面です。

「周囲約四里の三輪山は、西辺の御本社の背後に当る大宮谷を含む禁足地のまわりに、九十九谷の山裾をひろげていた。少し登ると、右方の柵の中の禁足地が窺われたが、下草の茂るにまかせた禁足地の赤松の幹は、午後の日を受けて瑪瑙のようにかがやいていた。」(『奔馬』五)

« Près d'une centaine de valées rayonnaient du domaine interdit du mont Miwa, y compris le val d'Omiya qui débouchait vers l'ouest, derrière le sanctuaire principal. Après qu'ils eurent grimpé quelque distance, Honda aperçut la zone interdite elle-même, au-delà d'une clôture, sur sa droite. Les troncs rouges des pins qui y poussaient, en proie à une végétation enchevêtrée, rutilaient comme l'agate au soleil de l'après-midi. » (*Chevaux échapées*, traduit de l'anglais par Tanguy Kenec'hdu)

三輪山は「山」そのものが御神体と考えられており、山に登ることは神に触れることとされています。敬虔な気持ちから、とりわけ夏には素足で登り、じかに神に接しに参拝される方も、今日少なくないようです。

≪2017 年度第 3 回理事会報告≫　…事務局

日時：2017 年 7 月 20 日（木）15:00～16:50
場所：café WAKAKUSA　2 階
出席者：三野、野島、浅井、井田、高松、杉谷、藤村、三木
議題 1. 2017 年度暫定会員 93 名。会費未納者に督促。
議題 2. 前回理事会 (5/18) 後の活動：(5/22) 第 135 回フランス・アラカルト「美女と野獣　騎士と精霊」、(6/18) 三重日仏協会文芸講演会、(7/3) 第 136 回フランス・アラカルト「ブラッサンスのシャンソン紹介」。議題 3. 今後の行事：(7/23) 第 44 回日仏シネクラブ例会、(9/16) ガイドクラブ勉強会、(9/23) 秋の教養講座（本号巻頭頁に案内）、(10/14) ガイドクラブ散策 大神神社と今西酒造、(12/7) フランス・アラカルト特別篇「ワインパーティ」。議題 4. Mon Nara。議題 5. その他：HP 更新状況、奈良日仏協会公式フェイスブック、Mon Nara チラシ同封の原則確認、在京都フランス領事館主催「パリ祭レセプション」(7/14)。
次回理事会：9 月 21 日（木）15:00~16:30 放送大学奈良学習センター306 室にて

会員通信 ✉ ✉ ✉ ✉

★8 月 19 日（土）12:30～「奈良県ファインアーツコンサート 2017」奈良県文化会館国際ホールにて、連絡先 0742-62-0107（三木）
★11 月 23 日（木・祝）13:00~「詩と音楽のマリアージュ―フランス歌曲の午後」宇陀市 Foyer Vert にて、連絡先 090-8751-6408（藤村）

編 集 後 記

☆縁側の続きに糸瓜棚があって、夏になると茂った緑の葉叢やツルの間から黄色い花を咲かせている家を、昔は時々見かけました。小学校低学年ではヘチマ (luffa) を種から育てて観察ノートをつけるのが宿題でしたが、収穫した実を干してタワシにして秋に提出するところまで辿りついた人は、それほど多くはなかったような気がします。芽が出て双葉の間から本葉が出て、竹の支柱を立てるとバネみたいなツルを巻きつかせ、どんどん大きくなって、ついには花が咲いて、あの細長い実がなるまでに姿を変えていく糸瓜。どこか愛嬌があり、クラスの誰かのニックネームにもなっていたような気がします。☆今年生誕 150 年の正岡子規の糸瓜への愛着はよく知られています。この 3 月、東京根岸の子規庵を訪れ、庭の糸瓜棚を見たら、糸瓜が身近にあった頃のことが思い出されました。晩年、糸瓜棚を作らせて病床から身を起こして眺めていた子規。辞世の三句の中でも、息を引き取る直前に詠んだとされる「をととひのへちまの水も取らざりき」の句が、満月の夜にヘチマ水を取るとよいという俗信をふまえていることをその場の解説で聞き、しばらく糸瓜棚を眺めていました。(N. Asai)

◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、ホットなフランス情報などを歓迎します。誌面の都合で意味を極力変えずに表現を変えさせていただくことがあります。次号は**９月 30 日**が原稿締切日です。

Mon Nara　juillet－août　2017 **7－8 月合併号**　numéro282
奈良日仏協会　Association Franco-Japonaise de Nara
HP：http://www.afjn.jp　**E-mail**：nara.afj@gmail.com　**FAX**：**0742-62-1741**
〒630-8226 奈良市小西町 19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴［郵便物のみ］発行責任者：三野博司